

モハマド・アローシュ

パレスチナ労働者闘争連合(PWSU)委員長

パレスチナ連帯国際オンライン集会

2026年6月21日

皆様、

日本の親愛なる友人の皆様、

労働組合、連帯団体、民主主義運動、平和運動を代表して参加されている皆様、

私はパレスチナの労働者を代表し、またパレスチナ人民を代表して、心からの敬意と連帯の挨拶を送ります。そして、この連帯集会を開催して下さったことに深く感謝いたします。

この集会は、イスラエルがガザ地区およびヨルダン川西岸を含む占領地において、武器を持たない私たちの人民に対し、戦争犯罪、人道に対する罪、ジェノサイド(大量虐殺)、民族浄化、集団懲罰を継続しているという悲劇的な状況のもとで、極めて重要な意味を持っています。皆様の今日の集まりは、単なる連帯行動ではありません。それは、正義を守ろうとする人々が今なお存在し、自由を愛する諸人民の声が依然として不正義と侵略、そして新たなファシズムに立ち向かう力を持っていることを示す、人道的かつ道義的なメッセージです。

今日ここに皆様が集って下さったことは、単なる政治的立場や人道的連帯を示すものではありません。それは自由、正義、人権という価値への倫理的な責任を体現するものであり、それらの価値は距離や文化、言語の違いを超えて世界の人々を結びつけています。私は今日、現代史の中でも最も危険な局面の一つを迎えているパレスチナから皆様に語りかけています。私たちの人民と労働者階級は、人間そのもの、土地、アイデンティティ、そして未来を標的とした全面的な戦争にさらされています。それは占領、入植、封鎖が続く中で行われており、国際社会はいまだ国際法と国際的正統性に基づく諸決議を尊重させることができていません。

昨年、停戦合意が発表されたにもかかわらず、現地の現実はその停戦が実際には実現していないことを示しています。空爆、砲撃、銃撃は依然として続いており、パレスチナの民間人は今なお日々その代償を払わされています。報道によれば、停戦発表後も約1,000人のパレスチナ人が殺害されており、これは私たちの人民が今なお直面している惨劇の深刻さを物語っています。2023年10月以降現在までに、ガザ地区では8万3,000人を超える人々が命を奪われ、負傷者は17万2,000人を超えています。またヨルダン川西岸でも1,200人以上が殺害され、その中には数百人の子どもたちが含まれています。

しかし、これらの数字だけでは、この惨禍の大きさを理解することはできません。そしてこれらの数字は、80年前にアメリカ帝国主義によって広島にもたらされた恐るべき犯罪を私たちに思い起こさせます。一つ一つの数字の背後には一人の人間の物語があり、一人の犠牲者の背後には悲しみに沈む家族があり、破壊された一軒一軒の家の背後には人生そのものの記憶があります。数か月前、私はガザ地区出身の建設労働者と会いました。彼は20年以上にわたって建設

業に従事してきた、ごく普通の労働者でした。毎朝家族のために生計を立てようと働いていましたが、この残酷な戦争によって、自宅も仕事も、そして二人の子どもも失いました。

私が彼に「最もつらかったことは何ですか」と尋ねたとき、彼は飢えや避難生活、失業について語ったのではありません。彼はこう言いました。「いちばんつらいのは、子どもたちに『明日はもっと良くなる』と信じさせることが、もうできなくなったことです。」この言葉は、まさにパレスチナ人民全体の悲劇を凝縮しています。

また、ある避難所で、一人のボランティアがパレスチナの少女に「戦争が終わったら何をしたいですか」と尋ねました。少女はこう答えました。「飛行機の音を聞かずに、一晩中ぐっすり眠りたい。」ガザの子どもたちは、世界中の子どもたちにとって当たり前であるはずのささやかな夢さえ奪われています。安全な学校も、公園も、遊び場も、そして安心して暮らすという当たり前の感覚も奪われています。一世代全体が、恐怖、欠乏、そして深刻な心の傷のもとで生きているのです。

友人の皆さん

パレスチナの悲劇はガザ地区だけにとどまりません。ヨルダン川西岸では、入植地建設と土地収奪がかつてない速度で進められています。ファシスト的な入植者たちはイスラエル軍の保護のもとで、パレスチナの村や町を襲撃し、農民を攻撃し、財産を焼き払い、オリーブの木を引き抜き、土地を奪い、道路を封鎖し、労働者に対する迫害を日常的に行っています。こうした攻撃は、すでにパレスチナ人の日常生活の一部となってしまっています。

私はここで、オリーブの収穫期に南ナブルス地域で出会った一人の農民の話を紹介したいと思います。彼は父親が何十年も前に植えたオリーブの木々について誇らしげに語り、「この木々は私たち家族の所有物であるだけでなく、家族の歴史そのものなのです」と言いました。しかしその後まもなく、彼の土地は入植者の襲撃を受け、50年以上の樹齢を持つものも含め、多くのオリーブの木が引き抜かれました。後日再び彼を訪ねたとき、彼は黙って畑の前に立っていました。彼が失ったものは単なる木ではありませんでした。彼は土地の記憶そのものを失ったことを悲しんでいたのです。

ヨルダン川西岸で起きていることは、単発的な暴力事件ではありません。それは、パレスチナの土地に新たな政治的・地理的現実を押し付けるための、組織的な植民地主義プロジェクトの一部です。それは占領政府が進める政策に基づくものであり、イスラエルによる全面支配を確立し、いわゆる「紛争の決着」を押し付け、国際決議に基づく独立した主権国家パレスチナの実現を阻止することを目的としています。

その中でも最も危険な計画の一つが、「E1 計画」として知られるものです。この計画は、東エルサレムの東側に建設された入植地群を占領下のエルサレムと連結することを目的としており、その結果、東エルサレムをパレスチナ社会から切り離し、ヨルダン川西岸を南北に分断された二つの地域へと分裂させることとなります。この計画は、パレスチナ人だけに対する脅威ではありません。それは、「二国家解決」および国際的諸決議に基づく公正な和平の実現可能性そのものに対

する直接的な打撃なのです。私たちには、このような植民地主義的政策に対して声を上げる共通の責任があります。これらの政策は、人権と国際法を侵害し、平和への可能性を根本から損なっています。

同時に、ガザ地区に課されている封鎖は依然として続いており、国連や国際人道支援機関が繰り返し訴えているにもかかわらず、住民に必要な生活物資が十分に届いていません。検問所や国境通過地点には依然として厳しい制限が課されており、必要不可欠な援助物資の搬入が妨げられています。その結果、人道状況はかつてないほど深刻化しています。

友人の皆さん

しかし、このような苦しみの中にあっても、パレスチナ人民は決して屈していません。占領当局は幾度となくパレスチナ人の意思を打ち砕こうとしてきましたが、人々から生きる権利と自由への信念を奪うことはできませんでした。パレスチナの都市、村、難民キャンプでは、現在も平和的な市民抵抗と民衆運動が続いています。労働者、労働組合員、学生、女性、若者たちは、民族的権利、社会的権利、人間としての権利を守るために活動を続けています。そして私たちも、イスラエル軍による弾圧、暴力、追跡、逮捕にさらされながらも、常にその先頭に立ってきました。

最近では、トゥルカレム、ラマッラー、ナブルス、ヘブロン、ジェニン、ベツレヘムなどの都市で、パレスチナ人政治囚の釈放を求める集会や座り込み行動が行われました。また労働組合組織も、労働者の権利を守り、彼らに加えられている侵害を世界に告発する活動を続けています。さらにパレスチナの労働者代表団は、ジュネーブで開催された国際労働機関(ILO)総会に参加し、戦争、占領、入植政策によってパレスチナ労働者が置かれている深刻な状況を国際社会に訴えました。

私たちは総会や声明、報告書、セミナー、各種会談を通じて、パレスチナ労働者問題は単なる経済問題や職業問題ではないことを訴えてきました。それは人権、社会正義、そして人間の尊厳の問題です。パレスチナの労働者は失業や貧困だけに直面しているわけではありません。移動の自由の制限、職場の喪失、経済施設の破壊、そして働く権利そのものの剥奪にも直面しています。イスラエルは、約 30 万人のパレスチナ人労働者からイスラエル国内労働市場で働く権利を 3 年連続で奪っています。さらに封鎖と集団的懲罰政策は、貧困と失業率をかつてない水準まで押し上げました。ファシスト的な占領政府の政策と実践によって、パレスチナ労働者階級は最も深刻な被害を受けているのです。

しかし、こうした困難にもかかわらず、私たちの人民は民主主義と国家建設への信念を失っていません。今年 4 月には、183 の地方自治体で地方選挙が実施されました。これは、占領、戦争、分裂という状況の中でも、パレスチナ人が民主的な政治生活を守り続けていることを示す明確なメッセージでした。この選挙において、私たちの仲間 86 名がヨルダン川西岸の地方自治体や市議会に選出されました。またガザ地区で選挙が実施されたデイル・アル＝バラフ市でも、私たちの仲間の男女が当選し、そのうちの一人は副市長に選ばれました。

さらに現在、パレスチナ総選挙の実施に向けた取り組みも続いています。それは民族的統一を強化し、パレスチナ社会の団結と抵抗力を高めるための重要な民主的課題です。私たちはその一環として、パレスチナ国民評議会選挙および立法評議会選挙への準備も進めています。

日本の友人の皆さん

私たちが今日皆さんに語りかけるのは、日本の人々こそ私たちの苦しみを深く理解できると信じているからです。日本の人々は戦争の惨禍と破壊の影響を知っています。都市が破壊され、罪のない市民が紛争の代償を払わされることがどのようなことかを知っています。同時に、日本の人々は、災害や破壊の後に復興し、生きることへの希望を取り戻すことの意味も知っています。だからこそ、私たちは皆さんのパレスチナ連帯の中に、平和、正義、人間の尊厳を守る崇高な人道的価値を見えています。

私たちは、日本の労働運動、市民運動、平和運動がパレスチナ人民に寄せてくださっている支援を高く評価しています。特に、日本の連帯運動の仲間たち、とりわけ ZENKO の皆さんに深く感謝しています。ZENKO はこれまで、労働組合活動、社会活動、人道支援活動を支援し、多くの被災したパレスチナ家族の生活を支えてきました。

また、パレスチナ労働者闘争連合 (PWSU) が進めてきた支援プログラムにも協力し、人々の生活を守り、連帯の旗を高く掲げるうえで大きな役割を果たしてきました。この連帯の価値は、物質的な援助そのものだけにあるわけではありません。それが発する人間的なメッセージにこそ大きな意味があります。パレスチナの労働者が、日本に自分たちとともに立つ労働者や労働組合員、忠実な友人たちがいることを知るとき、自らの声が世界へ届いていることを実感します。そして、尊厳、正義、自由を求める闘いが決して孤立したものではないことを知るのでした。

同時に私たちは、占領、入植、戦争を支援しているすべての主体や企業の責任を追及する国際的努力を強化するよう呼びかけます。また、国際法と人権に基づく平和的なボイコット運動と連帯運動を継続するよう訴えます。今日、パレスチナ問題は、単に一つの民族が自由を求める問題ではありません。それは、国際社会が正義、国際法、人権という原則を守る能力を持っているのかどうかを問う試金石となっています。もし世界が民間人を守れず、入植活動を止められず、民族自決権を保障できないのであれば、国際法秩序そのものが問われることとなります。

私たちは特権を求めているわけではありません。国際法の枠を超える何かを要求しているのでもありません。私たちはただ、人民の自由、占領の終結、入植活動の停止、そしてパレスチナ人が他のすべての民族と同じように自らの土地で尊厳をもって生きる権利を求めているだけです。この困難な歴史的局面においても、私たちは改めて確認します。パレスチナ人民は正当な民族的権利を守り続けます。そして自由、独立、公正な平和のための正当な闘争を続けます。

どれほど大きな困難があろうとも、私たちは民族的権利の実現、公正かつ包括的で均衡のとれた平和の達成、自決権の実現、独立国家の建設、そして占領地からの占領の終結のために闘い続けます。また、世界の自由を愛する諸人民、とりわけ国際労働運動・労働組合運動の連帯が、私たちの人民の抵抗と不屈の精神を支える重要な力であり続けることを確信しています。

パレスチナの労働者を代表し、
平和を待ち望む家族を代表し、
安全な未来を夢見る子どもたちを代表して、
大阪そして日本全国の友人の皆様に、心からの感謝を申し上げます。

どうかこれからも正義、自由、人間の尊厳のために、私たちとともに歩んでください。
皆様の自由な声と勇気ある行動に敬意を表します。
そして皆様の支援と連帯に深く感謝します。
また近いうちにお会いできることを願っています。
パレスチナ・日本・国際連帯の友好万歳！
自由・進歩・平和・正義の勢力万歳！
不正な戦争と野蛮な爆撃の声を沈黙させよう！
公正な平和万歳！ 人間の尊厳万歳！